

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

5&6

MAY / JUNE
2009

CONTENTS

ピョートル・アンデルシェフスキ ピアノ・リサイタル.....	1~2
「茨城の名手・名歌手たち 第20回」 出演者オーディション.....	2
吉野直子 & クレメンス・ハーゲン デュオ・リサイタル.....	3~4
最近の公演から.....	4~5
インフォメーション.....	6



左から:ピョートル・アンデルシェフスキ[Photo:Robert Workman]
クレメンス・ハーゲン[Photo:Astrid Ackermann] 吉野直子[Photo:武藤 章]

己の信ずる道を行く孤高のピアニスト、水戸芸術館に初登場！

● 5/31(日) ピョートル・アンデルシェフスキ ピアノ・リサイタル

今、聴き逃せないアーティストが水戸芸術館にやってきました。ポーランド・ワルシャワ出身のピアニスト、ピョートル・アンデルシェフスキです。

1990年のリーズ国際コンクールにおいて、予選で弾いたベートーヴェン〈ディアベリ変奏曲〉の圧倒的な演奏が審査員、聴衆を驚かせ、高く評価されたものの、別の曲の演奏に自身が失望し、本選を棄権。その後、あまたのレコード会社から〈ディアベリ変奏曲〉の録音の打診が舞い込んできましたが、「録音にはまだ早い」とその誘いをすべて断ってしまったという、当時20歳を越えたばかりの若きピアニストの破格の存在感と完璧主義者ぶりは、世界中から注目を集めました。

アンデルシェフスキは、その後、地道に演奏活動をつづけ、じわりじわりと評価を高めていきます。今年4月に40歳になったアンデルシェフスキは、今や、21世紀の音楽界を背負って立つ“未来の巨匠”の一人として期待されていて、少なくともクラシック音楽の本場ヨーロッパでは、押しも押されぬピアニストとして評価を確立しているのです。

そんな“中堅”にさしかかったアンデルシェフスキですが、一風変わった存在感と鬼才ぶりは相変わらず。まさに“己の信ずる道を行く孤高のピアニスト”と言えるでしょう。vivoでは、青澤隆明氏によるインタビュー記事からアンデルシェフスキの発言を引用し、その独特の魅力の一端に迫ります。

※以下、アンデルシェフスキの発言部分は、すべて『レコード芸術』2008年4月号(音楽之友社刊)から引用。

ポルトガル人？ アンデルシェフスキ

アンデルシェフスキは、ポーランド人とハンガリー人の間に生まれました。しかし、自らを「本質的なコスモポリタン」と呼ぶアンデルシェフスキは、ヨーロッパ西端の国・ポルトガルに親近感を覚え、その首都リスボンに居を構えています。アンデルシェフスキは、ポルトガルが生んだ詩人フェルナンド・ペソアの熱心な読者であり、インタビュアーの青澤隆明氏が「ポルトガル民族は本質的にコスモポリタンである。真のポルトガル人がポルトガル人であったためにはない。なぜなら、彼はつねにすべてであったのだから」といったペソアのテキストを紹介すると、彼は喜んでこう答えます。

「OK、私は同意します。というのも、ポルトガルはヨーロッパの端にあって、大陸の終わりであるか、なにかべつものの始まりであるか、という運命の選択を持っている。15世紀や16世紀には、ポルトガルは驚くべき賭けに出たわけです。知らないところへ、大洋を未知の領域まで探索した。それは歴史上のことで、今日ポルトガルはとても小さな国だけれどね。当時のポルトガルは大国で、実際初めて日本にやってきた西洋の国でしょう。だから、ポルトガルにいと彼(ペソア)の言うことが理解できる。ポルトガルがどれだけ小さく、どれだけヨーロッパから離れているにせよ、大洋が現前に存在します。ペソアがすべてだというような意味において、大洋はすべてであるからね。海は、無であり、すべてである。決して知りえない、無意識の世界だ。深くで…、無限で…。」

「運命。それは非常にポルトガルのもの言いだ。フアドなんてそう、ファトンからきているのだから。そう、とても東洋的じゃないかな？ 運命には逆らえない。ただ沈んでいだけだ。はははは。必死で助かろうなんてもがかない。私がここで言っておきたいのは、沈んでいくのはとてもノーブルな行動でしょう？ ポルトガルにいと、とても高貴な感情をもちますよ。自分自身を沈んだままにしておくのはとてもノーブルで、ワーワー叫んで助かろうとあがくのはあまり高潔ではない(笑)。ポルトガルにはなにか超越した感情があり、一種大きな視野をもっているように思える。私はいま理想論を言っているのだから、ポルトガル人がすべてそうだという意味じゃないけれど。」

コミュニケーションへの希求

常に思索する演奏家であるアンデルシェフスキは、聴衆とどうコミュニケーションできるかということに対しても、非常に意識的な音楽家です。CDはCDでももちろん素晴らしいのですが、アンデルシェフスキはとりわけライブで真価を発揮する演奏家と言えないでしょうか。

「自身が音楽のなかに感じることは、必ずしも自分がコミュニケーションできたことを意味するわけではない。とても奇妙な状況で、私にはよく起こるのだけれど、自分がしていることから離れていると感じるときほど、よりよくコミュニケーションができるんだ。自分が演奏していることを考えず、それに没頭せずにいるときほど、実際にコミュニ



ピョートル・アンデルシェフスキ [Photo: Sheila Rock]

ケーションをずっとよく進行させていくことができる。しかし、それにはまず、自分自身が非常に深く集中する音楽の内に入りこんでいて、そののち自分自身をそこから分離することを許すにいたるわけだ。ステージでのコミュニケーションはまたこれと少し違って、弾けば弾くほどに、どのように作用しているのかわからなくなる。」

「よく覚えているのは、1998年にアメリカでふたつのコンサートを行なったときのことです。ひとつはニューヨークで、私にとって重要なコンサートだったから、とてもよく練習して集中して臨んだ。結果よく演奏できたと思った。けれど、よくコミュニケーションできた、とは思えなかった。2日後、べつの場所で演奏したら、ストレスは消えて、演奏していると完全に隔離していると感じた。自分自身に言いましたよ、ああ、これじゃマシみたいに演奏しているんじゃないかって。それは奇妙な感覚でね、だけど不愉快ではなかった。その演奏会の後半、〈フランス組曲第5番〉を弾いたけれど、ほんとうによくコミュニケーションができたと思ったし、演奏の後、聴衆の顔をみてそう確信した。トランス状態に入ったみたいでしたよ。彼らを私の世界になんとか運び入れたようだった。」

魅力のプログラム

“このリサイタルでは何かが起こる”と期待を抱かせずにはおかないアンデルシェフスキの発言の一端をご紹介してきましたが、残りの紙面では今回のプログラムについても触れておきましょう

う。J.S.バッハ、シューマン、ヤナーチェク、ベートーヴェンという、アンデルシェフスキが近年特に力を入れている作曲家の作品が選ばれています。

まず、J.S.バッハの〈パルティータ 第6番 ホ短調 BWV830〉。6曲からなるバッハの〈パルティータ〉(BWV825～830)は、同じく全6曲からなる〈イギリス組曲〉(BWV806～811)や〈フランス組曲〉(BWV812～817)をすでに書き上げ、アルマンドやサラバンドなどの舞曲を中心に構成される組曲という様式を完全に手中に収めていたバッハが、それらの集大成あるいは「総覧」として位置付けたかのような曲集です。〈第6番〉は、曲集を締めくくるにふさわしい規模と重厚さを備えています。アンデルシェフスキの鋭い感性と卓抜なテクニックが、バッハの名作とどう向き合うのか、たいへん楽しみです。

次は、シューマンの作品。残念ながら、現時点で詳細はまだ明らかではありませんが、アンデルシェフスキのことですから、意表をついた作品を選んで来る可能性もあります。どうぞお楽しみに！なお、決定の連絡が入り次第、担当者のブログでお知らせします。

休憩をはさんで、チェコの作曲家ヤナーチェクの〈霧のなかで〉。4つの小品からなるこの曲集は、1912年に作曲されました。チェコ語の抑揚を生かしたオペラ創作での成功を夢見ていたヤナーチェクですが、〈イェヌーフア〉など現在では傑作として知られているオペラも、当時のチェコの聴衆には見向きもされず、彼は不安にさいなまれていました。当時のヤナーチェクの心象風景を写

し取った作品とも言える〈霧のなかで〉の演奏で、アンデルシェフスキは私たち聴衆を、作曲家の心の奥底へと導いてくれるに違いありません。

最後はベートーヴェンの〈ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 作品110〉。1821年から22年にかけて作曲された、ベートーヴェンの最後から2つ目のピアノ・ソナタです。この偉大な作品については解説不要でしょう。ベートーヴェンが長年にわたって試行錯誤を重ねてきた様々な技法が、ここでは純化を極め、それが深い内面性と崇高な精神性の表現に結びついているのです。

ピアニストにとっては、その音楽性、テクニック、そして人間性までもが試されるおそろしい曲とも言えましょう。自らの全てを、聴衆の前でさらけ出すことになるからです。しかし、裏を返せば、聴衆との親密なコミュニケーションを希求してやまないアンデルシェフスキのような演奏家にとっては、まさにその本領を発揮し得る曲だとも言えます。どうぞお楽しみに、そしてお聴き逃しなく！

最後に新譜情報を。昨年12月、カーネギー・ホールでのリサイタルをライブ収録したCD『ピョートル・アンデルシェフスキ ライヴ・アット・カーネギー・ホール』がEMIミュージック・ジャパンから発売されます(TOCE 90091/5月13日発売)。5月31日の演奏会当日は、水戸芸術館ミュージアム・ショップ「コントロール」でももちろん即売いたしますので、こちらもお楽しみに！ 《関根》

明日の未来を切りひらく音楽家が、ここから生まれます。

● 6/7(日)「茨城の名手・名歌手たち 第20回」出演者オーディション

茨城県に関わりのある音楽家を広く紹介し、県内や全国の音楽シーンに新しい才能を送り込んできた「茨城の名手・名歌手たち」。1990年の水戸芸術館開館以来、毎年継続している企画で、今年で第20回を迎えます。今回は、「管楽器・打楽器・声楽・器楽アンサンブル」が対象です。(参加申し込みは、5月12日必着で締め切り。「鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器・邦楽アンサンブル」は、次回、来年の対

象になります。)

さて、10月17日(土)に予定される本演奏会に先立ち、6月7日(日)に出演者オーディションを行います。(入場無料。日程の詳細は5月中旬以降に決定します。)第1回奏楽堂日本歌曲コンクール第1位の小泉恵子さん(ソプラノ)、ロン=ティボー国際音楽コンクール第5位の大崎結真さん(ピアノ)、第66回日本音楽コンクール第2位(1位なし)

の清水良一さん(バリトン)といった、国内外の大舞台で活躍する音楽家たちも、最初は皆このオーディションの場を踏んでいます。その意味で、このオーディションは、次代を担う音楽家の誕生に間近に接する貴重な機会と言えるでしょう。ぜひ足をお運びください。 《関根》



左から：吉野直子 [Photo: 武藤 章]、クレメンス・ハーゲン [Photo: Konzertbuero Nikolaus Schmidt]

ハープとチェロが織り成す、どこまでも優美で温かな音楽

●6/17(水) 吉野直子 & クレメンス・ハーゲン デュオ・リサイタル

わが国が誇る国際的なハープ奏者の吉野直子と現代最高の弦楽四重奏団のひとつと評されるハーゲン弦楽四重奏団のチェロ奏者のクレメンス・ハーゲンによるデュオ・リサイタルが実現します。ハープとチェロのアンサンブルというのは、それぞれの楽器の真の名手でなければ成し得ない、非常に希少な演奏形態であると言えるでしょう。

2人の名手が初共演

吉野直子は、水戸芸術館専属の水戸室内管弦楽団の演奏会に、もはや準レギュラーと言えそうなくらい数多く客演を重ね、また、ニュー・イヤール・コンサートのステージなどにも度々登場いただいている、水戸芸術館ではお馴染みの演奏家のひとりです。第9回イスラエル・コンクールに17歳で優勝。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、フィラデルフィア管弦楽団などの欧米の一流オーケストラ、小澤征爾（水戸室内管弦楽団音楽顧問）、ニコラウス・アーノンクール、スーピン・メータ、ピエール・ブーレーズなどの指揮者と共演。また、ヴァイオリンのギドン・クレーメル、フルートのジャン＝ピエール・ランパル、オーレル・ニコレなどと室内楽の演奏会を行っています。水戸芸術館でも96年にクレーメルとのデュオ・リサイタルを行っています。さらにザルツブルク、マールボロ、ルツェルン、サイトウ・キネン・フェスティバル松本などの音楽祭から招待を受けるなど、華々しくも精力的に活動を行っています。

その吉野直子が「本当に自然な音楽を愛する人。音楽そのものを、一番大切にしている人。おほかたでいながら、とても繊細で美しい」と尊敬と信頼の念を寄せる音楽家がクレメンス・ハーゲンです。彼は、ハーゲン弦楽四重奏団の創立時からのメンバーで、ギドン・クレーメルの主宰するクレメラータ・ムジカへの定期的な出演に加え、マルタ・アルゲリッチ、アレクシス・ワイセンベルク、アンドラーシュ・シフなどの演奏家と室内楽で共演しています。オーケストラとの共演も多

く、1995年夏のザルツブルク音楽祭では、ニコラウス・アーノンクール指揮ヨーロッパ室内管弦楽団と共にシューマンの〈チェロ協奏曲〉を演奏、以来、音楽祭の常連となっています。また、ダニエル・ハーディングやクラウディオ・アバドの指揮でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と度々共演、さらにギドン・クレーメルとともにソリストとしてアーノンクール指揮ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団と共演しています。水戸芸術館では、97年と08年にハーゲン弦楽四重奏団のメンバーとして、同楽団の演奏会に出演しています。

吉野直子は、今回のデュオ・リサイタルについて、次のように語っています。「クレメンスとの出会いは、1997年にギドン・クレーメルを通して。直接の共演の機会はなかったものの、その時からお互いに『いつか一緒に弾けたら良いね』と話してきました。その後は、ルツェルン祝祭管弦楽団などで度々同じステージに立ってきましたが、ようやくデュオが実現します。今回のプログラムは、チェロ&ハープのオリジナル作品と、チェロ&ピアノの作品を織り交ぜたプログラムになります。ハープのやわらかで繊細な音色が、ピアノと共演する時とはまた違ったチェロの魅力を引き出すことができるのでは、と思っています。」

木立を吹き渡る風のように、優美で、軽やかな吉野直子のハープと、温かくも、時に深い陰影を刻む、クレメンス・ハーゲンのチェロ。2人の名手の初共演に、ご期待ください。

叙情性溢れるプログラム

演奏会の幕開けは、ドビュッシーの〈チェロとピアノのためのソナタ〉です。原曲はチェロとピアノのために書かれていますが、今回はピアノ・パートをハープが受け持ちます。作曲されたのは第一次世界大戦が開戦した翌年の1915年。同年10月には直腸癌の診断を受けるに至る病魔に苦しみながら、戦時下に、ドイツ的なソナタ形式に依らない、フランス音楽の伝統をベースにした新しいソナタを生み出すべく書かれた作品

です。

続いてグリンカの〈夜想曲〉。グリンカは、19世紀のロシア国民楽派の父と呼ばれ、チャイコフスキーにも大きな影響を与えたロシアの作曲家です。〈夜想曲〉の原曲はピアノ曲で、『別れ』という副題が付けられています。限りなく優しくして澄んだメロディーをもつ、幻想的な夜の音楽です。今回は、ハープの独奏でお聴きいただきます。

さらにハープのソロで演奏されるのが、再びドビュッシー作品で〈ロマンティックなワルツ〉です。オリジナルはピアノのための作品で、リリー・ラスキーヌによるハープ編曲版が取り上げられます。タイトルが示す通り、優美でロマンティックなワルツ作品です。

ところで、吉野直子は現代作品の演奏にも力を注いでいます。水戸芸術館でも1992年にはオーレル・ニコレ（フルート）と今井信子（ヴァイオリン）との共演で武満徹の〈そして、それが風であることを知った〉の世界初演を行っていますし、99年にはヴォルフガング・シュルツ（フルート）とヴェロニカ・ハーゲン（ヴァイオリン）との室内楽でグバイドゥーリナやブリテン、武満の作品を取り上げています。そして、今回はユン・イサンの〈チェロとハープのための二重奏曲〉とルトスワフスキの〈ザッハー変奏曲〉という2つの現代作品が紹介されます。

ユン・イサンは、1917年に韓国で生まれ、ドイツで活動を行った作曲家です。芸術創造ばかりでなく社会運動においても信念を貫き通した人物です。67年に韓国中央情報部（KCIA）により共産主義者として告発を受け投獄され、軍事裁判で死刑を求刑されます。しかし、ブーレーズ、シュトックハウゼン、ストラヴィンスキーをはじめ世界中の音楽家180名による嘆願書や西ドイツ政府の働きかけにより、2年後に釈放されています。〈チェロとハープのための二重奏曲〉は84年の作品。ユンにとってチェロは、自分自身を表すことに用いられることもある重要な楽器です。そのかけがえのないチェロがハープと共に奏で

る、魂の音楽をお聴き下さい。

ルトスワフスキは、1913年生まれのポーランドの作曲家です。44年から56年にかけて、ポーランドは共産主義国家として、芸術家たちの創作面でも規制が行われました。そのような状況をくぐり抜け、ルトスワフスキは、自由を遂行すべく前衛音楽の作曲に打ち込みました。〈ザッハー変奏曲〉は、76年の作品で、20世紀音楽の大パトロンであるパウル・ザッハーの70歳の誕生日を祝して書かれた、無伴奏チェロのための作品です。ザッハーの名前を音高に読み替えた主題をもとにした変奏曲です。

演奏会では、もう1曲、無伴奏チェロ作品が取り上げられます。それは、バッハの〈無伴奏チェロ組曲〉から第1番 (BWV1007) です。かつて、パブロ・カザルスが「バッハを弾くことによって、この世に生を享けた喜びを私はあらたに認識する」と語り賞賛したこの作品を、名手ハーゲンの演奏でお楽しみください。

そして、演奏会を締めくくるのが、シューベルトの〈アルペジジョーネ・ソナタ D.821〉です。アルペジジョーネとは、ウィーンの楽器製作者シュタウファーによって1823年頃に考案された、チェロとギターを組み合わせたような楽器を指

します。この楽器はその後あまり普及せず廃れてしまったのですが、シューベルトがこの楽器のために書いたのが、この作品です。今日では、チェリストたちにとっての重要なレパートリーとなっています。哀愁を帯びたシューベルトならではの叙情的な世界が展開されます。

吉野直子とクレメンス・ハーゲン——名手2人が心を通わせて紡ぎ出す音楽を、どうぞお聴きになってください。 《中村》

最近の公演から

MARCH



1



2



3



4



5

モーツァルト:

ピアノ・ソナタ全曲演奏会【第4回】

演奏とお話:野平一郎(3月6日)

モーツァルトが故郷ザルツブルクに別れを告げ、ウィーンに出てから書かれた傑作ソナタ群を紹介している今年度の「ピアノ・ソナタ全曲演奏会」。1月23日の【第3回】につづき【第4回】は、1783年頃に書かれたソナタ〈第12番〉と〈第13番〉、そして1785年に出版された数少ない短調ソナタのひとつ〈第14番〉などが演奏された。野平さんの演奏はますます絶好調で、円熟期のソナタの深々とした味わいをじっくりと楽しませてくれた。また、この日のお話のキーワードは「演奏」。モーツァルトがソナタを作曲した当初からその曲の楽譜が出版されるまで、彼が自身でどのように演奏し、どのように曲を「推敲」していったのか、聴き手の想像を豊かにふくらませてくれるエピソードが紹介された。アンコールは、ソナタ〈第11番〉から第3楽章「トルコ行進曲」。《関根》アンケートから ●外は冷たい雨、しかし、ホール内は、野平さんのすてきな音でモーツァルトのソナタを心行くまで楽しめて、幸せな時間でした。第5回、第6回がさらに楽しみになりました。買い求めたCDでこの幸せを再度味わいたいと思います。(水戸市:K.T.さん) ●〈第14番〉は、モーツァルトの心情を反映したかのような美しい演奏で、思わずうっとりしてしまいました。CD化が今から楽しみです。(那珂市:Y.T.さん) ●平安時代の美しい流麗なひらがなの「書」をみたような感じでした。一見、平易にみえても演奏が難しいのがモーツァルトです。音楽の速度や変化、構成、バランス、色彩感など、野平さんのとぎすまされた美意識を楽しませていただきました。(水戸市:Eさん)

合唱セミナー 講師:藤井宏樹(3月15日)

女声アンサンブル「Juri」、合唱団「ゆうか」、メネルコール「広友会」などの指揮者として、充実した活動を展開している合唱指揮者・藤井宏樹氏をお迎えして実施された今年の合唱セミナー。現代日本を代表する作曲家の一人、三善晃の混声合唱曲〈木とともに 人とともに〉を、田中直子さんの伴奏で、半日を費やして練習した。藤井氏の設けたテーマは「いのち」。いのちの意味、その言葉の響き、そのあたたかさやぬくもりなどを、物理的・精神的両面から考え、感じながら歌うことが、参加者には要求された。藤井氏の情熱的な指導に、参加者も心からの歌声で応え、しだいにその演奏にも「いのち」が宿っていった。最後は、おさらいとして、全員で全曲を通して歌って、感動的な歌声とハーモニーの余韻の中で終了した。《関根》

埴美里サクソフォン・リサイタル(3月22日)

常陸太田市出身で、現在はフランスのセルジー・ポントワーズ音楽院に留学中の若きサクソフォニスト埴美里さんが、記念すべきデビュー・リサイタルを成功させた。共演者に埴さんの師である原博巳さん(サクソフォン)、服部真由子さん(ピアノ)を招き、フランク:ヴァイオリン・ソナタ(サクソフォンへの編曲版)、ドビュッシー:ラプソディ、サンジュレー:デュオ・コンチェルトなど、埴さんのフランス留学の成果が存分に発揮されるプログラムが組まれた。初リサイタルという張りつめた空気にもかかわらず、伸び伸びと自らの音楽を表現しきった埴さんと、彼女を力強く支えた共演者に盛大な拍手が送られた。アンコールは、(1) オフエンバック:舟歌、(2) テレマン:ファンタジーの2曲。《関根》アンケートから ●女性でサクソ奏者はとても貴

1~2.モーツァルト:ピアノ・ソナタ全曲演奏会【第4回】

3~4.合唱セミナー 2009

5.埴美里サクソフォン・リサイタル



1



2



3



4



5



6



7

重、そして素晴らしい演奏でした。若々しく、今後にまた期待いたします。ピアノの演奏も最高でした。(東茨城郡:Y.H.さん) ●すばらしかったです。サクソフォンの音色にこんなに深みがあることを初めて知りました。情感があり、良かったです。柔らかい音が特に魅力的でした。(高萩市:H.S.さん) ●ソプラノ・サクソとアルト・サクソの「はもり」がすごくきれいだった。ピアノもすごくなめらかできれいだった。(M.K.さん)

ATMアンサンブル第23回演奏会(3月26日) & 第15回碧南演奏会(3月27日)

小管 優を迎えての、モーツァルト:ピアノ三重奏曲 ハ長調 K.548、ブラームス:ピアノ四重奏曲 第3番 ハ短調 作品60、ドヴォルジャーク:ピアノ五重奏曲 イ長調 作品81 B.155という、3曲の「ピアノ室内楽」プログラム。百戦錬磨のATMアンサンブルの名手たちに対し、最初のリハーサルの前は緊張した様子も見せていた小管 優だが、ひとたびリハーサルに入れば裂帛の気合いと集中力でたちまち対等に渡り合う。若き俊英の気迫に刺激され、ATMアンサンブルメンバーもますます燃える、という相乗効果で、密度の濃いリハーサルがくり広げられた。モーツァルトの透明な抒情、ブラームスの懊悩と情熱のたぎり、ドヴォルジャークの生命の躍動… 3つの異なる世界が鮮やかに描かれてゆく。演奏会の熱気は肌寒い外気を忘れさせ、盛大な拍手がいつまでも6人の音楽家たちを包んでいた。翌日は碧南市芸術文化ホールでの館外公演。毎年演奏会を行う「第2の故郷」で、碧南の人々のあたたかい歓迎に迎えられ、ATMアンサンブルと小管 優はのびのびとアンサンブルを愉しんだ。《矢澤》

アンケートから ●プログラム、そして演奏は超絶(つくば市:K.E.さん) ●室内楽のだいたいを、十分に味わいました。ありがとう(S.Y.さん) ●モーツァルト 生き生きとして、目の覚めるような音色だった。小管さんはじめてききました。素晴らしい(無記名の方) ●ブラームス、人の感情をすべて表すような演奏でした。どこかに沈んでいた感情をひっぱり出された感じで聞きました。ホールで聞いているのでなかったら、オイオイと声をあげて泣いていたと思います(無

記名の方) ●(ブラームスの第3楽章) 私は熱い涙をこらえるのが大変だった。最高でした!(水戸市:J.T.さん) ●ドヴォルジャークの第4楽章 一素晴らしい弦の合奏に感応して、小管さんの躍動感が一層増し、特によかったです(西東京市:K.H.さん) ●音楽による物語を語ってくれているようでよかったです(水戸市:K.K.さん)

パイプオルガン “名器・名曲” 探訪の旅 [出演:浅井美紀](3月30日)

2003年から『幼児のためのオルガン見学会』の講師を務め、水戸の幼稚園・保育園児たちからも人気を集めているオルガニスト浅井美紀さんによるレクチャー & 演奏会。「今回の演奏会を通して、オルガン音楽やオルガンという楽器に興味をもっていただきたい。」と演奏会前に浅井さんは語っていました。第1部は、「世界のオルガン体験ツアー!」。壮麗な装飾が施された中世のオルガンや3万本ものパイプ数をもつ現代オルガンなど、古今東西の名器と呼ばれるオルガンをスクリーンに映写しながら、浅井さんが紹介しました。第2部は「ドイツとフランスのオルガン音楽」というテーマで、クーブラン、バッハ、シューマン、レーガー、メシアンなど、オルガン音楽の発展に大きな役割を果たしたドイツとフランスの作曲家の作品が紹介されました。《中村》

アンケートから ●本日のオルガン音楽の出逢いはとても貴重な素晴らしい思い出の1ページとなりました。遠き歴史のロマンを満喫できました。浅井さんのオルガン演奏に感激しました。(無記名の方) ●演奏も耳に慣れた曲が多く、なじみやすいコンサートで良かったです。下の子が水戸市内の幼稚園に通っているのだから「幼児のためのオルガン見学会」も楽しみにしています。上の子のときも、とても楽しかったです。(水戸市:K.H.さん) ●浅井さんの持つ音楽の魅力とそれを表現できるテクニックはまさに神様からの贈り物です。今後も健康に気をつけてますますのご活躍をお祈りしています。選曲もよかったです。(無記名の方)

1.堀 美里サクソフォン・リサイタル
2~4.ATMアンサンブル第23回演奏会
5~7.パイプオルガン“名器・名曲”探訪の旅 お話と演奏:浅井美紀

●●●お知らせ●●●
音楽部門に
新しいスタッフ(学芸員)、
高巢真樹 が加わりました。

初めまして。4月から音楽部門に入りました高巢真樹です。生まれも育ちも神奈川で、水戸での新生活をスタートしたばかりですが、さっそく休日の夕暮れ時の千波湖散歩が趣味になりそうです。小さい頃に始めたピアノ、吹奏楽やオーケ

ストラでのコントラバス演奏など、これまでいろいろな形で音楽と関わってきました。これからは「音楽と出会う場」を創る仕事で一日も早く一人前になれるようがんばっていきますので、どうぞよろしくをお願いします。 高巢真樹

information

■ チケットに関するお問い合わせ

…水戸芸術館チケット予約センター/029-231-8000
営業時間/9:30～18:00(月曜休館)

■ 公演内容や企画に関するお問い合わせ

…水戸芸術館音楽部門/029-227-8118

■ 【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

新しい友の会のご案内

水戸芸術館が行うさまざまな事業へ、皆様にお気軽にご参加いただくため、お客様サービスと企画内容のさらなる充実をめざし、芸術館の管理運営を行っております財団法人水戸市芸術振興財団が友の会を直接運営いたします。

年会費:2,000円

1. 館の広報誌や事業のご案内の送付
 2. 専属楽団・劇団のほか指定事業のチケットの先行予約
 3. 現代美術ギャラリー・展示会へのご優待・ご招待
- このほか皆様に楽しんでいただけるようなサービスをご用意しておりますので、ぜひご入会をお願い申し上げます。

● 館の運営をご支援いただく新制度の「運営維持会員」も募っております。会費は当財団への寄付の扱いになり、税制上の優遇措置がございます。

* お申し込みやお問い合わせは下記までお願いいたします。

財団法人水戸市芸術振興財団 事務局

Tel.029-227-8111

<https://www.arttowermito.or.jp/sf/sendform.html>

これからの演奏会・残席情報

○…残席あり(20席以上) △…残席わずか(20席未満) ×…残席なし
中央…中央ブロック 左右…裏…左右ブロックおよびステージ裏 補助…補助席

◎ピョートル・アンデルシェフスキ

ピアノ・リサイタル……………5/31(日) 中央△、左右・裏○

◎吉野直子&クレメンス・ハーゲン

デュオ・リサイタル……………6/17(水) 中央△、左右・裏○

◎水戸室内管弦楽団 第76回定期演奏会

……………7/ 4(土) 中央△、左右・裏○

……………7/ 5(日) 中央△、左右・裏○

◎高橋悠治の肖像

……………7/18(土) 中央○、左右・裏○

※4/16(木)現在の状況です。

※公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。

※固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な5・6月のスケジュール

コンサートホールATM

■ アミーチ・カルテットとMCOアカデミー受講生による

ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏プロジェクト vol.1

□ アミーチ・カルテットと受講生によるカルテット(4組)

5/7(木)18:30開演 入場無料

■ ピョートル・アンデルシェフスキ ピアノ・リサイタル

5/31(日)16:00開演 料金(全席指定):¥4,000

■ 「茨城の名手・名歌手たち 第20回」出演者オーディション

6/7(日)入場無料 ※詳細はお問い合わせください。

■ 吉野直子&クレメンス・ハーゲン デュオ・リサイタル

6/17(水)19:00開演 料金(全席指定):¥3,000

エントランスホール

■ パイプオルガン プロムナード・コンサート

5月:16日(土)、23日(土)、30日(土) 6月:未定

開演時間:12:00/13:30(2回公演)

□ ゴールドenウィーク・スペシャル(親子で楽しむパイプオルガン・コンサート)

5/4(月・祝)12:00/13:30 入場無料

出演(オルガン連弾):柳澤文子、野田美香

※演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

■ 朗読劇 Book Mobile『僕らが天王星に着くころ』

5/2(土)19:30開演 入場無料 ※要事前申し込み

詳細は演劇部門(TEL029-227-8123)までお問い合わせください。

会場:現代美術ギャラリーワークショップ室

■ 劇団唐組(新作)水戸公演『黒手帳に頬紅を』

5/15(金)、5/16(土)、5/17(日) 各日19:00開演

料金(全席自由):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥2,000

会場:水戸芸術館広場特設紅テント(雨天決行)

■ 立川志の輔 独演会

5/31(日)14:00開演 料金(全席指定):¥3,500

■ 劇団バンダラコンチャ『相思双愛』

6/10(水)19:00開演 料金(全席指定):A席¥5,500 B席¥3,500

■ 水戸芸術館開館20周年・水戸市市制施行120周年・水戸藩開藩400年記念事業

Dance & Solo『鳥の歌』

6/26(金)19:00開演、6/28(日)14:00開演

料金(全席指定):一般¥2,000 学生(小学生以上)¥1,000

□ Dance & Solo『鳥の歌』★KIDS DAY

6/27(土)14:00開演

料金(全席自由):一般¥1,500 学生(小学生以上)¥1,000 キッズ(3歳以上)¥500

現代美術センター

■ ツェ・スーメイ

2/7(土)～5/10(日) 9:30～18:00(入場は17:30まで) 休館日:月曜日

料金:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方と付き添い1名は無料

■ 第42回水戸市芸術祭

□ いけばな展

5/22(金)～5/24(日) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

※最終日は17:00閉場、入場は16:30まで

□ 美術展覧会

第1期【日本画・洋画・彫刻・工芸美術】

5/31(日)～6/12(金) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

第2期【書・写真・デザイン・インスタレーション】

6/17(水)～6/28(日) 9:30～18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日 入場無料

茨城の主な5・6月の演奏会 ※有料公演のみ

◆ 佐川文庫 TEL/029(309)5020

■ 若手ピアニストシリーズ ― 若きピアニストたち ―

北村朋幹 ピアノ・リサイタル 5/30(土)18:00開演

◆ 茨城県民文化センター TEL/029(241)1166

■ 川井郁子コンサート ～情熱と哀愁のヴァイオリン～

5/24(日)14:00開演

◆ 水戸市民会館 TEL/029(224)7521

■ 第35回茨城大学管弦楽団 サマーコンサート

6/27(土)14:00開演

◆ ギター文化館 TEL/0299(46)2457

■ 世界の銘器 マヌエル・カーノ コレクション・コンサート

5/5(火・祝)17:00開演

■ 佐藤純一 ギターリサイタル 6/7(日)15:00開演

■ 高橋竹童 津軽三味線のひびき 6/28(日)15:00開演

◆ ノバホール TEL/029(852)5881

■ テトラフォノス コンサート2009 ～ピアノ四重奏の夕べ～

5/15(金)19:00開演

■ 筑波大学管弦楽団 第65回定期演奏会 5/24(日)14:00開演

■ カワイコンサート ～松本和将ピアノリサイタル～

5/28(木)19:00開演

■ 筑波大学吹奏楽団 第61回定期演奏会 6/12(金)19:00開演

■ 100万人のクラシック エスター・キム ヴァイオリン・リサイタル

6/26(金)19:00開演

■ 土浦交響楽団 第58回定期演奏会 6/28(日)14:00開演

水戸芸術館音楽紙『ヴィーヴォ』 2009年5月発行 第141号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail[ankmr@arttowermito.or.jp] URL[http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美・関根哲也・高巢真樹・中崎美智代・

中村晃・矢澤孝樹(編集長)

DTP/村田征司[株式会社イセブ]

印刷所/株式会社あけぼの印刷社

次号は…

MCOと準・メルクル、4度目の邂逅!